小学部中学年グループ研究

1　研究グループの概要

- 令和５年度より、小学部Ｉコース３、４年生を中学年グループとする。
- 在籍児童１７名（３年生１１名、４年生６名）
- 研究対象授業：音楽（主に音楽１グループ）
- 研究グループの構成は、担任８名＋地域支援部主任

2　昨年度の実践

- 個別学習の国語・算数を対象授業とし、授業実践シートを用いて指導と評価の一体化について研究を行った。その研究の成果と課題を踏まえ、今年度は集団授業である音楽を対象授業としてに研究を行っていくこととした。

3　研究経過

①学習指導要領を参考に「音楽的な見方・考え方」について確認した。
②『ラーニングマップ』を用いて国語・算数の実態把握をした。それを踏まえた上で、教科横断的に実態を把握することを共通確認した。
③音楽の実態把握
音楽活動のチェックリスト(※１)に基づき、実態把握を行った。（補足資料①）
そのチェックリストの内容から、観点「器楽」において、本グループの児童の多くがより高い目標を達成できると考え、「器楽」を題材とする活動を取り入れた授業づくりをテーマに研究を進めていくこととした。
④授業実践
- 昨年度作成した授業実践シートを基に、集団授業用のものを新たに作成した。（補足資料②）
- 児童の課題にせまる単元を設定した。

実態
・色楽譜を見ながらキーボード等の音階楽器で簡単な曲を演奏することができる。
・自分なりのテンポで演奏してしまうことが多く、友達と一緒に演奏することが難しい。

→

課題
・それぞれが個々で演奏する力は高い。
・合奏につながる力を身に付けたい。

→

ベルハーモニーでの分担奏
ねらい（合奏につながる力）
・自分以外が奏でる音を聴く
・人と一緒に演奏することを楽しむ
・テンポを意識する
・役割の理解

＜取り組みの様子＞・授業実践シートを用いて評価、授業反省、授業改善を行った。

目指す授業像：ミュージックベルの分担奏を通して、音階やリズムの理解を深め、友達と一つの音楽をつくりあげる
楽しさや達成感を感じられる授業

曲の音階やリズムを覚える

活動	一人で曲を演奏する。
指導方法と工夫点	・色楽譜を用いて音階を視覚的に分かりやすく提示。 ・曲は児童にとって馴染みのある『きらきら星』。リズムも一定で分かりやすい。 ・指差し等の支援。（楽譜を指差すか、ベルを指差すかは児童の実態に応じて行った。）
児童の様子	・馴染みのある曲だったこともあり、２回の取り組みでほとんどの児童が音階を覚えて演奏できるようになった。
課題	「分担」の理解。

→

「分担」の理解

活動	教師と分担奏をする。
指導方法と工夫点	・実態に応じて担当する音を２音ずつ設定。 ・色楽譜に顔写真を付け、担当する音を分かるようにした。 ・指差しの支援は色楽譜のみ。（ベルの指差しはしない。）
児童の様子	・回数を重ねるごとに、自分の担当する音が分かり、タイミングを待って鳴らすことができるようになった。
課題	・対教師なので相手に合わせようという意識は低い。（教師が児童に合わせて演奏したため。）

→

友達とタイミングを合わせて演奏する

活動	友達と３人一組で分担奏をする。
指導方法と工夫点	・色楽譜の顔写真と、指差しの支援をなくす。（音を聞いて演奏ができるようにする。）
児童の様子	・顔写真や指差し等の支援がなくても、お互いのベルの音を聞いてタイミングを合わせ、一つの曲を演奏することができた。
課題	・実態差があり、簡単にできてしまった児童もいた。和音での分担奏にするなど、児童の実態に応じて課題を設定できると良かった。

4　成果と課題

・ねらいであった「役割や分担を理解して演奏する」「友達の演奏を聞く」「友達と一緒に演奏することを楽しむ」をどの児童も達成することができた。今後は合奏へとつなげていく。

- 取り組み後、アセスメントシートで児童の実態を再確認したところ、「器楽」分野を始め、全体的に音楽の学習状況の進歩が見られた。
- 授業実践シートを用いたPDCAサイクルでの取り組みを通し、授業改善ができた。
- 評価規準についての考え方、設定の仕方についてグループ間で意見を交換しながら、考えを深めることができた。
- 集団授業での評価規準の設定の難しさを感じた。規準を低く設定しすぎても、高く設定しすぎても児童の成長を適切に評価することができない。適切な規準を設定するために実態把握を丁寧に行うことの大切さを改めて感じた。
- 今回、「友達と合わせる」ことがテーマのひとつであったが、これは音楽だけで取り組んでいくのではなく、各教科等で横断的に取り組んでいくことが大切である。

※１参考文献『子どもの世界をよみとく音楽療法　特別支援教育の発達的視点を踏まえて』（加藤博之 著、明治図書）